

社会科部会

部会長：附属中学校 寺本誠

部会員：附属小学校 岩坂尚史 片山元裕

附属中学校 渡邊智紀

附属高等学校 飯島裕希 山川志保

大学 大脇和志

2024 年度活動報告：

社会科における「教師の学び合い」と小中高大連携

よりよい社会の形成に参画する資質や能力を育成するためには、社会科の授業はどのように改革されなければならないか、という課題意識から本部会の研究は始まった。

こうした資質・能力を培うためには、科学的・社会的認識、意思決定力、社会的実践力という三つの能力の育成を目指した学習が必要であると仮定し、これらを有機的に結びつけることを念頭に置いた研究を進めた。本部会では 2012 年に発足後、2015 年までの 4 年間ににおいて、小学校・中学校が連携しながら「社会的ジレンマ」に焦点をあてて実践及びその報告を行ってきた。2016 年度～2020 年度はさらに実践を積み重ね、ジレンマ教材の開発にとどまらず、社会科における 主権者教育や小中連携教育について研究を進めた。社会的ジレンマ研究については、お茶の水女子大学 学校教育研究部（2015 年）『探究力・活用力を育てる授業・保育の研究 ―お茶の水女子大学附属学校園による実践研究事例集―』を参照された。

2021 年度の本部会は、「幼小中高大の接続を意識した開発研究」をテーマに、「社会的論争問題」について、小中の発達段階や学習の連続性を踏まえ、論争的問題を通して政治的リテラシーを涵養する教材開発および社会科学学習の在り方について、小中連携の観点から議論を進めた。また、附属小学校の研究主題である「てつがく」、附属中学校研究主題である「振り返り」の視点を活かし、附属学校園の社会科での学びを通じた知識や考察の深まり、児童生徒の社会の見方・考え方や自身の判断基準の深まり、自身の考察を社会との関係の中で問い直すなどの振り返りが与える影響などについて考察した。

2022 年度からは、本学にコンピテンシー育成開発研究所が設置されたことを機に「学びに向かう力」を研究テーマに据えた。新たに附属高校教員が加わり、小・中・高の 12 年間を見通した連携教育を一層推進することができた。2023 年度は、これまでの研究を引き継ぎつつ、「学びに向かう力」の一環として「対話による学び」をテーマに加えて研究を行った。2024 年度は、部会メンバーの社会科観・ビジョンと年間計画と育てたい力の共有を主要テーマとして、より研究を深めた。

2024年度は、月に1回16時30分から18時頃まで、附属中学校にて実践交流を進めたほか、公開研究会等の機会を活かして互いに授業を参観し、児童・生徒の対話による学びへの理解を深めた。附属小3名、附属中1名、附属高（地理歴史科・公民科）2名、大学教員1名、そして筑波大学附属中学校教員の参加機会も得て、学校種を越えた連携・交流を進めることができた。

本部会の特徴は、自由闊達に議論される中でも「子どもの事実で語る」ことが軸となるとともに、「教師の学び合い」を包容・支援する雰囲気が醸し出されていることであろう。自らの実践をメンバーの前に詳らかに「さらけ出す」ことで、課題の指摘を受けると同時に、自分が見逃していた良さや価値を発見してもらうことができる。部会を重ねる度に実践を振り返り、問い直し、より良い実践へつなげようとするサイクルが定着していることを実感する。

本年度は、次の予定で研究を進めた。

- | | | |
|-------|-----------------|--------------------------|
| 第1回 | 5月7日（火） | 社会科観・ビジョンと年間計画と育てたい力の共有① |
| 第2回 | 7月2日（火） | 社会科観・ビジョンと年間計画と育てたい力の共有② |
| 第3回 | 9月3日（火） | 中学校の発表（公開研究会に向けて） |
| 第4回 | 11月5日（火） | 高校の発表（附属連携研究会報告） |
| 第5回 | 12月3日（火） | オンライン会合 |
| 第6回 | 1月14日（火） | 小学校の発表（公開研究会に向けて） |
| 第7、8回 | 一年間のまとめと来年度への展望 | |

最初の2回は、メンバー全員の「社会科観」を共有する機会とし、今までの実践や本年度の計画についての報告を行った。第3回、4回、6回は、中学校、高等学校、小学校の順番で各附属が設定する研究会や研究課題に向けた授業実践の検討を行った。

第3回では、附属中学校渡邊教諭より中学校1年生地理的分野において、「アジア州 都市問題の解決」についての指導案の提案・検討が行われた。中学校の研究課題である「創造的思考の習慣」について、地理の授業の中でどのように「創造的思考」を「習慣」化するか議論となった。

第4回では、附属高等学校飯島教諭より高等学校2年生公共において、「EBPMと向き合う市民」についての指導案の提案・検討が行われた。社会課題を授業の中でどのように扱うべきか、また、学習指導要領で提示されている「妥当性・効果・実現可能性」をどのように担保すべきか議論となった。

第6回では、岩坂教諭より5年生「人工知能と向き合う～情報を受け取るわたしたち～」について、片山教諭より6年生「コロナ時代から学ぶ～全国一斉休校に焦点を当てて～」についての指導案の提案・検討が行われた。いずれの提案においても、「私」と「私たち」の相違と共通性について、また、誰に軸足を置くかによって、当事者性、正しさが変わりうることについて、小学生の発達段階を踏まえて、どこまで深めるべきか議論となった。また、「議

論の空中戦」とならないための根拠の在り方も、各附属学校園共通の課題として話題となった。

一年間かけて各附属学校園の実践を互いに報告し合い、検討することにより、以下のような共通性をあらためて確認することができた。

児童・生徒たちは、それぞれの発達段階に応じて、互いに関わり合いながら協働性を培い、課題解決に臨む姿が顕著に見られた。協働性が発揮される場面では、より探究的な姿勢を見せていることが話題となった。これは、お茶の水女子大学附属校園ならではの一貫した教育に対する姿勢が生徒を形づくったのではないかと、私たちは共通の認識を持っている。

小中高の実践提案とも、それぞれ重点の置き方は異なるが、いずれも社会的な課題を取り扱い、解決しようとする力や姿勢を養うことが志向されている。社会的な課題を解決するためには、身に付けた知識や技能を活用し、新しい考えを創造する力が必要であるし、さらに深めるためには、他者と協働する力が必要となる。本年度報告された授業では附属小中高とも、協働的な学習場面を意図的に組み込むことで、個人で解決を図るよりも、はるかに思考が深まる姿が報告された。小中高と繰り返し、このような学習を経験できることが、自然に協働性を発揮する素地がつくられたと考えられる。

また、部会で議論するなかで、社会科における協働的問題解決学習の過程で育む資質・能力として、あらためて「批判的思考力」「課題生成力」「意思決定力」「協働的思考力」「社会参画力」がキーワードとして飛び交っていることを実感する。これらの力の定義や、他に養うべき力の有無など、まだ部会の中では十分検討・整理されていない。ただ、議論の中で頻繁にこれらのキーワードをもとに語り合う場面が多いのは、部会の各メンバーが自覚的・意識的に授業の中に組み込んで授業をデザインしている証左であると言える。

来年度以降は、さらに各校園の実践報告を積み重ね、これらの資質・能力を育むためのカリキュラム・デザインのあり方について検討を進めたいと考えている。また、小中高大の教員が全てそろそろ、貴重な「教師の学び合い」の機会として大切にしていきたい。